「ともに旅する教会」をめざして

10 の問いかけのためのハンドブック
シノドスからの問いかけに答えてみませんか？

シノドス的な教会をめざしてともに歩みましょう

昨年、2021 年 10 月より始まった世界代表司教会議第 16 回通常総会は、「ともに歩む [= シノドス的] 教会のため——交わり、参加、そして宣教」というテーマのもとに世界の各地で取り組みがなされています。

「シノドス的教会」とは、多くの人々とともに現代社会の中で生きていく教会です。教会を通じて神と人、人と人とが出会います。出会いは豊かな交わりを生み出します。豊かな交わりがあるおかげで人は神と一致し、人種や文化、言語を超えて人は人と一致していきます。

わたしが東京大教区の教区司教として掲げているモットー「VARIETATE UNITAS（多様性における一致）」は、「シノドス的教会」の中に実現していきます。

教会が交わりの教会となるために、わたしたちは他者を尊重し、認めなければなりません。格差と差別が幅を効かせ、人々の心が弱い立場の人々、外国の方々を排斥し、否定するような風潮が強くなりつつある今の日本の社会です。そんな社会の中にあって、出会いを大切にし、互いに受けとめ合いながら関わりを生きようとするわたしたちの教会の姿勢は、主イエス・キリストの姿を社会と人々に証しすることに他ならないのです。

こうして、神さまのこととイエスさまの言葉が多くの方々に伝わっていきます。

「シノドス的教会」はこのように宣教する教会でもあるのです。

さて、わたしたちが「シノドス的教会」、すなわちともに歩む教会を作りあげるためには、第一に必要なものは「聞く」ことです。相手の語る言葉に耳を傾けることが求められています。その点で「シノドス的教会」とは「聞く教会」と言いかえてもよいでしょう。

「聞く」ためには「祈り」が求められます。自分の心を開け放ち、自分の心を真っ白にすることなしには相手の言葉が心の中にしみ込まないからです。わたしたちは信仰の共同体で、社会で、家庭の中で、「どうぞお話しください。僕（しもべ）は聞いております」（サムエル記上 3 章 10 節）と少年サムエルのように祈りながら、謙虚になりながら聞くのです。

このハンドブックは、教皇庁シノドス事務局から提示された「シノドス準備文書」にある 10 の設問をもとに作成された分かち合いのハンドブックです。設問に基づき、わたしたちの今日に適応できるように、いくつかの分かち合いのための問いかけを作りました。皆さんの集いの中で、このハンドブックを活用しながら、「聞く教会」、「ともに歩む教会」を体験してください。小さな取り組みかもしれませんが、お互いに耳を傾けるところ

から、信仰の共同体はさらに豊かになっていくと信じています。

おわりに、教皇フランシスコは 10 月 16 日に、世界代表司教会議第 16 回通常総会の会期を延長すると発表なさいました。本会議は 2023 年と 2024 年の二度にわたって開催されます。これは 2025 年に予定されている『大聖年』との結びつきを念頭においたものです。教会は『大聖年』に向けて「歩み」ます。同じようにわたしたちの教区も「歩み」を続けます。そして、わたしたち一人ひとりも信仰の旅路を「歩む」のです。

このハンドブックが「歩みの中の一つの歩み」（教皇さまの言葉）にとってのよい手引きとなりますように。

2022 年 11 月

カトリック東京大司教区大司教

タルチシオ菊地功

はじめに

世界代表司教会議第 16 回通常総会（シノドス）は昨年 2021 年 10 月に開会しました。各教区のフェーズ（段階）、各司教協議会のフェーズ、大陸別のフェーズと段階を経て、2023 年の本会議に向けての準備をすることになっています。

そのために教皇庁シノドス事務局から『シノドス準備文書』が発表されました。そこには基本的な質問と、それに基づく 10 の設問が提示されています。ぜひ、それぞれの信仰の共同体（小教区共同体と信者が集う小共同体）にてこれらの設問について向かい合い、分かち合い、話し合いをしていただきたいと思います。

よりよい分かち合いを目指して

この 10 の設問の内容は幅広いものです。そこで、よりよい理解を得られるために簡単な説明を加えました。また、設問の内容を東京教区の現状に適したものにしました。

なぜ設問があるのか？

「シノドス準備文書」によれば、基本的な質問のあとに次のように記されています。

「この基本的な質問がどのような経験を思い起こさせるか、自問すること。これらの経験をより深く読み直してみること。…霊はわたしたちに何を求めているか。…どのような道が開かれているか」

基本的な質問とそれに続く 10 の設問が求めているのは、これまでの歩みの振り返りであり、今の歩みの様子であり、将来どのような歩みをする

かの展望なのです。そうしますと、特にこの 10 の設問については観想的な次元で読み、味わい、内省し、祈った上で回答することが勧められます。

そして、これらの設問と向かう際には、個人ではなく共同体でなされるのが望まれます。3 人以上の共同体の中でそこにおられる主イエス・キリストに信頼して、聖霊の息吹の中で設問への回答の試みをしてみたらいかがでしょうか。

エマオへの弟子たちのように

「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」（ルカ 24 章 32 節）。このエマオへの道のりで復活したイエスさまに出会った弟子たちの言葉を胸に刻んでいただきたいです。信仰の共同体の兄弟姉妹と共に語りあい、分かち合うことで未来に向かう教会の姿が少しずつ見えてくるのです。

教会のあり方、信仰の共同体のあり方を問い直すよい機会として、これらの質問と設問をたびたびとりあげていただきたいと思います。

本書の活用の仕方

それぞれ 10 の設問ごとに、関連するみ言葉、簡単な解説、そして東京教区としての問いかけを掲げておきました。小グループの「集い」などで設問と解説を読み、み言葉を黙想し、教区としての問いかけについて感じたこと、考えたことを自由に話し合ってください。

聖霊の導きにゆだねるために、「集い」の最初には「主の祈り」、最後には「アヴェ・マリアの祈り」をご一緒に唱えることをお勧めします。また、巻末に『シノドスのための祈り』（聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立っています）を掲載しました。「集い」の中でご一緒に唱えてください。

設問 1: 旅の同伴者

設問本文

教会でも社会でも、わたしたちは同じ道を並んで進んでいます。皆さんの地方教会では、「ともに旅をする」のは誰ですか。「わたしたちの教会」というとき、誰がその一部でしょう。誰がわたしたちにともに旅をするように頼んでいるのでしょうか。教会の枠の外にいる人たちも含めて、道行く友は誰ですか。明示的に、あるいは事実上、どういう人、グループが周縁部に取り残されているのでしょう。

み言葉

「沖に漕ぎ出しなさい Duc in altum」（ルカ 5 章 4 節）

説明

ペトロたちへのイエスさまの命令は「深いところへ舟を導きなさい」の意味です。足の届かない深いところは不安定で、安心できません。しかし、イエスさまは「深いところへ」と招きます。未だ知らない世界へと向かって行きなさいと言われるのです。舟とは現代世界の荒波にもてあそばれる教会のことです。教会はさらに深いところへと向かって、神秘の方へと向かって旅するのです。

「ともに旅をする」、「ともに歩む」。これがシノドス的な教会の特徴です。グローバル化した社会は自分たちさえよければそれでよいとする傾向があります。通信や物流、そしてネットワークでこれほど世界が一つになっているのにもかかわらず、いえ、一つになればなるほど、人は小さなグループを作って、他者を排斥してしまいます。自分たちさえよければそれでよいとする生き方が生まれてきます。わたしたちの教会もそうなっていないでしょうか。沖に漕ぎ出せないままになってはいないでしょうか。

東京教区としての問いかけ

あなたは、「信仰は旅である」という言い方をどのようにとらえ、理解していますか？

あなたには、信仰の旅を一緒に歩む家族、友人、仲間がいますか？

あなたにとって、信仰の旅を歩むために教会は役に立っていますか？

あなたの信仰共同体は、「ともに旅をする」共同体となっているでしょうか？

あなたは、共同体の他のメンバーに対して、あるいは周囲の人々に対してともに歩むよう寄り添っているでしょうか？

あなたの心の中に、他の文化、他の言語、他の民族への嫌悪感がありませんか。もしあったとしたら、それをどのように乗り越えてキリストにおける兄弟姉妹とさせていただきましたか。

設問 2: 聴くこと

設問本文

聞くことは最初の一歩ですが、それには偏見のない、開かれた精神と心が必要です。わたしたちの部分教会は、誰に対し「耳を傾ける必要がある」でしょうか。信徒、特に若者や女性はどのように耳を傾けてもらっているでしょうか。奉献生活の男女の貢献はどのように統合されているでしょうか。マイノリティの人、見捨てられた人、排除された人の声に耳を傾ける場はありますか。耳を傾けることを妨げている偏見や固定観念を認識していますか。わたしたちが生活している社会的、文化的背景に対しどのように耳を傾けていますか。

み言葉

「信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことによって始まるのです」（ロマ 10 章 17 節）。

説明

神の言葉が人となってわたしたちの間に住まわれた（ヨハ 1 章 14 節参照）。この真実がわたしたちの信仰の土台にあります。神は言葉を語りかける方だからです。言葉で世界を創造し、言葉で被造物を祝福します。このような語りかける神に、答えようとするところから信仰が始まります。ですから、わたしたちは神の言葉であるキリストの言葉に耳を傾ける必要があります。

キリストの言葉は教会の中で語られるばかりではありません。普段の生活の中で出会う人々、語り合う人々、交わる人々の言葉の中にキリストの言葉は隠されています。キリスト者とは、なによりも耳を傾ける人なのです。

教区としての問いかけ

あなたは、ミサの中で神のみ言葉に耳を傾けていますか？

あなたの信仰の共同体には、お互いに耳を傾け合う雰囲気がありますか。

あなたは、教会に集う人々の言葉に耳を傾けているでしょうか。「また、始まった」、「また、同じ話」と聞くことに飽き飽きとしていませんか。

あなたは、教会に集う子どもたちの声に耳を傾けていますか。「うるさい」、「気が散る」、「親がダメだ」と子どもたちを裁いていませんか。

あなたの住む地域にいる人々の声に耳を傾けていますか。

設問 3: 声に出すこと

設問本文

勇気と大胆さ、つまり、自由、真理といつくしみを統合して話すよう、すべての人は招かれています。地域社会やその団体の中で、二枚舌やご都合主義を排した、自由で真正な対話術をどのように促進しますか。さらに、わたしたちが属している社会との関係においてはどうでしょう。自分にとって大切なことを、いつ、どのようにして伝えるようにしますか。メディア全体（カトリック・メディアだけでなく）との関係はどう機能しているでしょうか。誰がキリスト教共同体を代表して発言しますか、またその人はどのようにして選ばれますか。

み言葉

「すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた」（使2章14節）。

説明

聖霊降臨の出来事は、ペトロたちに勇気を与えました。人々に対して、自分たちの信仰と生き方を表明し始めたのです。わたしたちは家庭で、お友だちの間で、地域で、そして教会で自分の信仰と生き方を表明しているでしょうか。また社会の不正や疑問に対して声をあげているでしょうか。

信者の一人ひとりに聖霊が働き、神の恵みの中で生きているのですから、自分が考えていることを遠慮せずに発言してよいのです。ただし、相手を論駁するためではなく、相手との深い対話の関係に入るために声をあげるのです。声を出すことと、聞くことは相互の関係にあります。聞いてもらえるから、自由に発言することができます。しかし、しばしば発言している人の声をさえぎってしまうことがあります。弱い立場に追いやられている人は声を発することができなくなっています。

教区としての問いかけ

あなたは、ミサの中でちゃんと声を発していますか？「アーメン」と言っていますか？他の人が祈っている声に心を合わせて唱和していますか？

あなたは、教会の中で声の大きな人の意見に左右されていませんか？

あなたは、信仰の共同体の中に自分の意見をハッキリと表明したくてもできないでいる人がいることに気づいていますか？

あなたの小教区共同体は、多国籍の方々の声に耳を傾けていますか？社会的なマイノリティの人々の声に耳を傾けていますか。

あなたの意見や考えは、マスメディアやネットの発言に左右されていませんか？

設問 4: 祝うこと

設問本文

「ともに旅をする」のは、共同体でみことばに耳を傾け、エウカリスチアを祝うことに基づいている場合にのみ可能です。祈りと典礼祭儀は、わたしたちが「ともに旅をする」のをどのように奮い立たせ、方向づけているでしょうか。この二つは、もっとも重要な決定にどのように刺激を与えているでしょうか。すべての信徒による典礼への能動的参加と、聖化の働きの実践をどう促進しているでしょうか。朗読奉仕と祭壇奉仕を実施するため、どのような空間が設けられているでしょうか。

み言葉

「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」（使 2 章 43 節）

説明

典礼はすべての教会活動の頂点であり源泉です。ですから、典礼からわたしたちは生きる力を頂きます。ミサは儀式（ceremony）ではありません。ミサは「祝い」（celebration）なのです。主イエス・キリストの過越の秘義を祝うのです。こうして、人は十字架で苦しまれ、死んで葬られ、三日目に復活なさった主イエス・キリストに深く結ばれていきます。

ミサについての理解と体験は、教会の神秘への理解と体験へとつながります。しかし、時として硬直化したミサ理解と体験に留まってしまうことはあるでしょう。いつも新しい心で典礼、とりわけミサに臨むことが求められます。

また、「ともに旅をする」、「ともに歩む」教会は、同時に「ともに祈る」教会です。多国籍、多文化の人々の一緒に典礼を祝うことは必要です

教区としての問いかけ

あなたは、よろこんで教会のミサに参加していますか？マンネリ化していませんか？

あなたは、ミサからどんな体験ができましたか？ミサから何を得ましたか？

あなたは、ミサに積極的に参加していますか？

あなたの信仰の共同体は、社会の多種多様な方々と一緒にミサをしていますか？異なる文化、言語、民族の方々と一緒にミサをしていますか？

あなたの小教区共同体は、ミサの中で奉仕する人々（侍者、朗読者、聖歌隊など）を養成していますか？

設問 5: 宣教における共同責任

設問の本文

シノダリティとは、教会の全メンバーが参加するよう求められている、教会の宣教に奉仕するためです。わたしたちは皆、宣教する弟子であるので、洗礼を受けた一人ひとりはいかにして宣教の主人公として呼ばれるでしょうか。社会での奉仕（社会的・政治的責任、科学研究や教育、社会正義の推進、人権保護、「共通の家」のケアなど）に取り組むメンバーを、共同体はどのように支えているでしょうか。彼らが宣教の論理でこれらの責任を生き抜くのを、皆さんはどのように支援していますか。宣教に関連する選びについての識別はどのようになされていますか、また誰がそれに参加していますか。多くの教会、特に東方教会の財産を構成するさまざまな伝統は、効果的なキリスト教のあかしという観点から、シノドスの様式を尊重しながら、どのように統合され適用されているでしょうか。さまざまな「自治権を有する（sui iuris）諸教会」が存在する地域では、どのように協力関係が機能しているでしょうか。

み言葉

「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである」（使 11 章 26 節）

説明

クリスチャン（キリスト者）と呼ばれるわたしたちは、イエスさまのよき便りである「福音」を教会から頂いて、それを携えて、それぞれが生きている場所へと向かいます。わたしたちは家庭で、地域で、職場で、社会でキリスト者らしく生きていきます。その生きる姿に周囲の人々は何かを感じ、イエスさまの存在を見いだすでしょう。また、社会の中には知らず

知らずのうちにイエスさまのように無償の愛に生きている人々がたくさんいます。そういった方々と出会わせていただいて、お互いに愛に生きていることの喜びを分かち合います。これが福音宣教です。

教区としての問いかけ

あなたは、福音宣教と聞くとどんなイメージを抱きますか？分かち合ってみましょう。

あなたは、自分がクリスチャン（キリスト者）であることを周囲の人々に証ししていますか？

あなたにとって、クリスチャン（キリスト者）として生きていくとはどのようなことだと考えていますか？

あなたは、あなたの周囲にイエスさまのことは知らないけれども、イエスさまのように無償の愛に生きている人がいることに気がついていますか？そういった人々と出会ったらどんな気持ちになりますか？

コロナ禍の中でイエスさまの福音を伝えるとはどういった可能性があるでしょう。考えてみましょう。

設問 6: 教会と社会における対話

設問本文

対話は、沈黙や苦しみをも含む忍耐の道であるものの、個人や諸民族の経験を集めることができます。わたしたちの部分教会では、どのような場で、どのような形で対話は行われているでしょうか。ビジョンの相違、対立、困難はどう対処されているでしょうか。隣接する教区と、地域の修道会と、また修道会の中で、信徒団体や運動体などと、またその中で、どのように協力が促進されているでしょうか。他宗教の信者や無宗教の人々と、どういった対話や共同責任の経験があるでしょうか。教会は、他の社会領域、つまり政界、経済界、文化界、市民社会、貧しい人々などとどう対話し、彼らからどのように学んでいますか。

み言葉

「死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は「それについて、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った」（使 17 章 32 節）

説明

使徒パウロはアテネで神さまについて、イエスさまの死と復活について語りました。しかし、多くの人々は見向きもしませんでした。パウロは対話を試みたのです。出会いは交わりを生み、交わりは対話をうながします。そして対話を通じて関わり合いは深まりますし、それまで気づかなかった新しい事実、新しい世界へと招かれます。コロナ禍で人と人とが向き合えない社会となりつつあります。そんな社会にあっても、わたしたちは社会のあらゆる人々との対話へと呼ばれているのです。力で押さえつけることなしに、相手を論破することなしに、互いの立場を認め合って対話をするのは愛のわざです。愛のわざですから対話の中には聖霊が働くのです。

教区としての問いかけ

あなたは、普段の生活の中で相手との深い対話をしたことがありましたか？

あなたは、考えの異なる人や年齢の異なる人との対話に入ったとき、どのようなことを感じましたか？体験を分かち合いましょう。

あなたの信仰の共同体には、人と人とが向き合って、話し合える雰囲気がありますか。

あなたは、対話を通じて立場の異なる人との連帯を体験したことがありますか？

あなたは、結論がなかなか見えてこない話し合いは無意味だと考えていませんか？

設問 7: 他のキリスト教諸派とともに

設問本文

一つの洗礼によって結ばれた、異なる信仰告白をもつキリスト者間の対話は、シノドスの旅において特別な位置を占めています。他のキリスト教諸派の兄弟姉妹とどのような関係性をもっていますか。どういった分野に彼らは関心があるでしょうか。こうして「ともに旅をする」ことからどのような実りを得てきたでしょうか。何が困難さでしょうか。

み言葉

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」（ヨハ 15 章 12 節）

説明

キリスト者は愛に生きる人々です。わたしたちの社会には数多くのキリスト教諸派があります。こういった他教会の方々との出会いと交わりは生まれているかが問われています。違いの部分だけに注目してしまい、主イエス・キリストに結ばれた兄弟姉妹だという意識を忘れてしまいがちです。

グローバル化が進めば進むほどに「自分たちさえよければ…」という思いが強くなります。そして、他者を退け、排除してしまいます。そんな社会にあってキリストを共に信じていることを原点にして他の教会の方々と交わるのは愛を証しするよい機会となるでしょう。

また、日本固有の課題として、キリスト教諸派以外に、他の宗教、信仰の方々との対話、連帯、行動が求められています。

教区としての問いかけ

あなたの周りに他のキリスト教の方々がいます。あなたは、彼らの生き方を見て、どんな点が尊敬できますか？

あなたは、多のキリスト教の方々とお互いに信仰を分かち合ったことがありますか？

あなたの信仰の共同体は、周囲にあるキリスト教諸派の方々と一緒に活動をしていますか？

あなたは、周りにいる他宗教の皆さんを尊敬していますか？敬意を抱いて接していますか？

他の宗教や信仰を生きる方々から学べる点はどこですか？

設問 8: 権威と参加

設問本文

シノドス的教会は、参加型で共同責任を負う教会です。追求すべき目標、それを達成するための方法、そして踏むべき段階をどのように特定するでしょうか。わたしたちの部分教会の中で、権威はどのように行使されるでしょうか。チームワークと共同責任の実践とはどういうものでしょう。信徒奉仕職と信徒による責任の引き受けはどのように促進されていますか。部分教会レベルでは、シノドス的機関はどのように機能していますか。それらは実りある経験となっていますか。

み言葉

「[彼ら、彼女らは、] 自分の持ち物を出し合って一行に奉仕していた」(ルカ 8 章 3 節参照)。

説明

イエスさまの周りにはたくさんの人々がいました。その人たちは自分たちができることをお互いに提供しながら生きていました。こういったイエスさまを通じての交わりと関わりの姿が教会の原型となっていったのです。事実、教会は多くの人々の参加で成り立っています。小教区共同体の牧者である司祭もまた、人々に仕えることを通じて参加します。信徒の皆さんが教会の運営に参加し、積極的に携わるのはすばらしいことですが、いつの間にか信徒だけが中心になった教会になりかねません。牧者である司祭と信徒の関係をもう一度見直す必要があるかもしれません。悪しき聖職者主義はは排除されなければなりませんが、その一方で教会の権威に対して否定的な理解や運営は避けなければなりません。こうして「ともに旅をする」教会は少しずつ成り立っていくのです。

教区としての問いかけ

あなたは、小教区共同体でどのような参加を果たしているでしょうか？どのような共同責任を担っているでしょうか？

参加とは教会での活発な活動だけではありません。祈りを通じての参加もあります。その点について気がついていますか？

あなたの小教区共同体では、高齢者の兄弟姉妹の果たす役割を皆で認め合い、大切にしていますか？

あなたは、教会の権威（司教、司祭）に対しての尊敬と信頼を抱いていますか？もし抱けないのだとしたら、その理由はなぜですか？

あなたの小教区共同体では、何かの決定をするときに運営委員会などが健全に機能していますか？

設問 9: 識別することと決断すること

設問本文

シノドス的な生活様式では、霊への共通の従順さから生まれるコンセンサスに基づいて、識別を通して決定がなされます。どのような手順と方法で、わたしたちは共同で識別し、決定を下すでしょうか。どうすれば、それらは改善できるでしょうか。位階的に組織された共同体において、意思決定への参加をどう促進できるでしょうか。協議のフェーズと熟慮するフェーズ、意思決定のプロセスと意思決定の瞬間をどのようにつないでいけるでしょうか。透明性と説明責任を、どのように、またどういったツールを使って促進できるでしょうか。

み言葉

「それで、兄弟たち、あなたがたの中から、霊と知恵に満ちた評判の良い人を選びなさい。彼らにその仕事を任せよう」（使 6 章 3 節）

説明

初代教会の人々は祈りの中から自分たちの共同体のための奉仕者を選び出しました。共同体での識別とは、自分たちのこれまでの歩み、そして今の現実、さらには将来の姿を皆で一緒に祈りながら決めていくことです。社会の急激な変化に東京教区の各小教区共同体はさらされています。その結果、例えば高齢化、信徒の減少、経済的な不安定さ、建物の老朽化といった具体的な課題が生じます。そういった課題に対して共同体でどのように祈り、考え、決断していくかが問われているのです。そのために必要なのは意志決定のプロセスです。この点がこの世の他の団体とは異なるかもしれません。教会はプロセスを大切するのです。

教区としての問いかけ

あなたのこれまでの信仰の歩みの中で、大きなチャレンジを受けたことがあったと思います。あなたは、それをどのようにして乗り越えていきましたか？自分の体験を分かち合ってみましょう。

あなたの小教区共同体では、これまでの歩みの中で共同体全体が考え、決断していったような出来事がありましたか？

あなたの小教区共同体では、これまでの歩みと今の様子とこれからのことをみんなで一緒に考える機会がありますか？例えば、バザーなどの行事は「今までもやってきたから、今年もやりましょう」といった動機づけで実行していませんか？

あなたの小教区共同体には、「そんなことは前例がありません」、「今までもそうやってきました」、「やったことがないので無理です」といった紋切り型の態度を示そうとする方々がいませんか？そんな方々とどのように過ごしていけばよいと考えていますか？

あなたの小教区共同体では教会委員会など共同体の運営に携わる人々の声が共同体全体に十分に伝わっていますか？

設問 10: シノダリティの中で自己形成すること

設問本文

「ともに旅をする」という霊性は、人間、キリスト者、家族、そして地域社会の養成のための教育原理となることが求められています。人々、特にキリスト教共同体の中で責任ある役割を担っている人々が、互いに耳を傾け合い対話しながら、「ともに旅をする」ことがさらにできるようになるために、わたしたちはどのような養成ができるでしょうか。識別と権威行使のため、どのような養成を提供できるでしょうか。わたしたちが浸されている文化のダイナミズムや、それがわたしたちの教会生活の様式に与える影響を読み取るのに、どういったツールが役立つでしょうか。

み言葉

「わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです」（ヨハ 17 章 23 節）。

説明

イエスさまは捕らえられる直前にこのように祈られました。教会に集う人々がキリストのもとに集められ、一つになることを望んでいます。そのためには、わたしたち一人ひとりが教会を通じて新しい人にならなければなりません。

「ともに旅をする」、「ともに歩む」教会となるためには、わたしたちは大きく変わる必要があるのです。

さらには新しい世代を育てなければなりません。

教区としての問いかけ

あなたは、教会のおかげで自分の生き方、あり方が変わったという体験がありますか？もしあったら分かち合ってみましょう。

これからの教会を考えていく上で、わたしたちは何を変えていかなければいけないでしょう。

あなたは、十年後のあなたの小教区共同体の姿を思い描けますか？

あなたは、十年後、あなたは自分の信仰に基づいて生きていると自信をもっていえますか？

あなたは、2020 年に出された『宣教司牧方針』について、どのような感想をもっていますか。

あなたは、『宣教司牧方針』で示された共同体の三つの柱を実現するためには、何をしたらよいかと考えていますか。

シノドスのための祈り
Adsumus Sancte Spiritus

（聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立っています）

聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立ち、
あなたのみ名によって集います。
わたしたちのもとに来て、とどまり、
一人ひとりの心にお住まいください。
わたしたちに進むべき道を教え、
どのように歩めばよいか示してください
弱く、罪深いわたしたちが、
一致を乱さないよう支えてください。
無知によって誤った道に引き込まれず、
偏見に惑わされないよう導いてください
あなたのうちに一致を見いだすことができますように。
わたしたちが永遠のいのちへの旅を続け、
真理と正義の道を迷わずに歩むことができますように。
このすべてを、
いつどこにおいても働いておられるあなたに願います。
御父と御子の交わりの中で、世々とこしえに。
アーメン

メモ

メモ

メモ

2022 年 11 月
カトリック東京大司教区